

『桐火桶抄』の本文

1

『桐火桶抄』とは、周知のように『桐火桶』は藤原定家の著作ではないことを述べ立てた書である。分量は僅少、零細、むしろ片々たるテキストとも見做されよう。しかしその内容は、書物の真偽をあげつらうへ論疑(偽)弁贋の書の系譜に立つものとしても興味深いばかりでなく、何より私たちにとっては、定家偽書批判の書の初期の例として、また『桐火桶』の成立問題にかかわる書として——『桐火桶抄』の成立問題自体、必ずしも決着をみていないとなればなおさら——注目されるところである。

而して、このテキストの書誌、内容読解、位置づけについては検討すべきことは少なくないが、それらの課題の多くと、対象を捉えるための理論上そして方法論上の問題については別稿で

川 平 ひ と し

2

考えたい。小稿では、諸課題のうち、特に書誌の問題を中心に——それも『桐火桶抄』の本文に密着し、その実体を明らかにすることを主目的として——検討しておきたい。

1 『桐火桶抄』(以下『抄』と略記する)の伝本は、形態上、

2 『井蛙抄』の伝本中に組み入れられているもの

3 『井蛙抄』、特にその第六「雑談」の一部と結びつき、かつ『水蛙眼目』として伝わるテキストにかかわる中に含まれているもの

4 単独に、ただし別種の資料(後述)の中に挿み込まれるように存しているもの

の三種にそれぞれ分かれる。直ちに察知されるように、『抄』の伝本は、頼阿の著作『井蛙抄』そして『水蛙眼目』の命名に至

るまでを記した長文の跋文と深く連関して伝存しているから、『抄』のテキストを尋ねること、それは『井蛙抄』『水蛙眼目』の諸本を広く眺め渡すことに他ならない。そこで、やや迂路を辿りながら私たちの目的に赴いてみたい。

『井蛙抄』『水蛙眼目』の伝本については、早く日本歌学大系・第五巻の解題ならびに久曾神昇の論があり、のち伝本を博搜し、整理した井上宗雄や近年の齋藤彰・野中和孝の論が続いている。改めて関連する諸伝本を参看し、特に『抄』を窓口として見直すと、諸本を簡略に判別・分類するための目安として以下のような諸点を挙げるができる。

(イ) 『井蛙抄』全六巻、すなわち第一・風跡事、第二・取本歌事、第三・(制詞事)、第四・同名名所、第五・同類事、第六・雑談の、内容・配列・構成。六巻を仮りにⅠ～Ⅵの符号で表示しておこう。

(ロ) 六巻のうち特に第六・雑談の条々の出入り。その分量により $a_1 \sim a_5$ の五類型を成す。当の類型の配列・構成も目安となる。

(ハ) 水蛙眼目「跋文」。長短あり。 $b_1 b_2 b_3$ の三種に分かれる。

(ニ) (私たちにとって最も重要な) 『抄』の有無。

(ホ) 第五・同類事の巻末に見える註記(①)⁶、ならびに『抄』の前後にあつて『抄』の由来ともかわる註記(②、後述)、第六・雑談の中途にあつて(ロ)の様態ともかわる註記(③)⁷の、

三種の註記。

(ハ) 『井蛙抄』の本文中に見える定家の呼称。「京極黄門」と記すものがそれで、その形態に三種存する。これを○△一で表示しておく。

(ロ) 奥書。基幹となる本奥書の有無に一定の収斂が認められる。これらの諸要素(それらの内容については後述)を点検し、相互連関を表示すると次頁のように一覧される。

とりわけ『抄』の有無の列を辿れば明らかなように、『井蛙抄』全六巻を持つテキストは、大観すれば『抄』非付載のグループと『抄』付載のグループとに分かれる。いわゆる『水蛙眼目』をも含めて広く『井蛙抄』にかかわるテキストを総覧すれば、おおよそ三グループに収斂していることになる。すなわち表上段の、慶安板本を含む、流布本系統とも呼びうる甲の類、中段の、中間的な要素の交じる乙と、天理本以下、続類従本までの『抄』を共に有する丙の類、そして下段の、『井蛙抄』六巻形態を取らず、従来『水蛙眼目』と見做されてきた類の三グループである。

以上の諸グループの他に、『井蛙抄』第六・雑談の一部があたかも「分離・独立」(齋藤)し、特別の由来・由緒を持つものとして享受されたとおぼしき「分離独立本」とも呼びうる類が存在する。 a_4 の条々を持ち、後に東常縁の消息二通の付載された島原図書館蔵松平文庫本『秘中秘』(Ⅱ・73)や、 a_1 の条々を持ち、「雑談記」の書名で伝わる伝本はこれら(分離独立本)として一

甲

丙

戊

— 17 —

括しうるであらう。

これらに加えて『井蛙抄』の一部の巻のみ残存している（残欠本）の類、さらに『井蛙抄』の特定内容の部分に着目して、本文を抽出・編成している（抄出本）の類を立てれば、おおよそ『井蛙抄』にかかわる諸伝本の状況を一わたり押さえることができるはずである。

3

これらの中で『抄』を有する『井蛙抄』のテキストを見ると、先表中段の、天理本・浅野文庫本に代表される丙を横に辿れば明らかのように、いずれも最初に第一（第五）を持ち、第五巻末に水蛙眼目「跋文」そして『抄』があつて、後に第六・雑談の内、a₃とa₅の部分を持ち、『抄』に関連して②の註記ならびに雑談の間に註記③が記入されている、という共通した性格を備えている。

右の性格の要点を、本文に即してさらに確かめてみよう。

先程、伝本の判別・分類の目安として挙げた①②③三種の註記のうち、『抄』の由来にかかわるものとして特に注目されるのは②である。すなわち『抄』を持つ『井蛙抄』六巻本の第五本文の末尾に次の如くある。

是已下ハ此巻外也、依為作者同人書加之

端一枚斗鼠食之

是れ以下は此の巻すなわち『井蛙抄』第五巻とは別の文章である

るが、作者は同一人すなわち頼阿であるから、之れを書き加える、ただし端の一枚ほどは鼠のために失われている、という趣旨の註記であらう。右のように註された後に水蛙眼目「跋文」、次いで『抄』が存するから、『抄』は跋文と共に本来『井蛙抄』中にあつたのではなく、この註記を施した某人によつて頼阿の筆作と認定されて『井蛙抄』第五末に書き加えられたのだということになるう。

「端一枚斗鼠食之」と云うとおり、事実直後にある跋文本文の冒頭はb₃の如く、「にや新撰をえらひて今所撰玄之玄也といへり」云々で始まつており不自然である。早く冒頭部分は欠損していたのであらう。ちなみに先述①のように三種あるうち残りのb₁b₂は、この失われた部分をあたかも有するかのように次の如くある。

b₁ 寛平延暦（寛平）の比は、此道の中興とみえたり、しかるに古今集なを貫之か心ニ八十成せざるにや、新撰三百六十首を撰て（略）

（桑原文庫本による。右傍（一）は神宮文庫本）

b₂ 古今集猶貫之心には十成せざるにや、新撰三百六十首を撰て古今哥二百八十首をのせて今所撰玄之玄也といへり

私云愚問賢注如此

（東北大本による。「にや……」の本文部分に貼紙して右を書く）

しかしb₂の「私云」に既に指摘されているように、右の文言は『愚問賢注』の「和歌の風體は、時うつり事変じて、代にしたが

ひ俗にひかれて、あらたまるべきか」云々の問に對する賢注、すなわち頼阿の言辭の中に、

今時いづれの體を正路として可_レ模哉の御たづねにいたりては、寛平延喜の比は此道の中興と見えたり。しかるに古

今集猶貫之心には十成せざるにや。新撰三百六十首を撰て、古今歌二百八十首をのせて今撰所、玄之玄なりといへり。

と見える部分をむしろ取り込んだものと考えられる。そもそも水蛙眼目・跋文と『愚問賢注』には他にも相互に類似する文言が含まれており、これらを全て頼阿の言説に他ならないと考えるなら——言い換えれば少なくとも水蛙眼目・跋文は頼阿作であることを疑うのでないならば——事は、すなわち右に見られるような文言の出入りと連関は、頼阿の發言・著述の先後やその過程の問題と深くかわつてゐるのかも知れない。

ともあれ『抄』は『井蛙抄』とのかかわりにおいては、こうしたテキスト上の位置関係の中に——述べたような文脈の纏わりつく註記②を持ち、水蛙眼目・跋文とセットを成して、かつ先記した本文上の諸要素を伴いながら——存在している。

4

注目されるのは『抄』を含み持つ諸伝本の流伝経路である。

すなわち『抄』を持つ際には必ずや（先表に示した）基幹となる本奥書のうち、Hの東常縁にかかわる奥書か、もしくはI・Jの堯惠の奥書を持つという際やかな事実がある。当該の奥書は左

記のとおりである。¹⁵⁾

H 此抄者秘之中秘、深之中深也、爰左近大夫平常縁云累代之作者、云當時之教寄、依此道之懇志不淺多年之芳契甚深令附与之説

I 右此書者頼公謁為世所被聞書也、号井蛙抄、於二条家納一時箱、本是六軸合為一冊、依有秘機奉傳付慶玉殿青蓮院殿廳務法印經柔賢息畢

明応三年^{甲寅}正月十一日 法印堯惠（花押）

J 此一部當家雖為秘説、依懇切令授兼載法橋畢、努々不可有他見者也

明応七年^{壬戌}三月三日 法印堯惠判

先表にも明らかなように、『抄』を「有」する伝本と奥書欄のH・I・Jが何らかの形で対応しているのである。逆に流布本系統と目される甲の諸本に常縁・堯惠にかかわるH・I・Jの影は認められない。つまり『抄』は東常縁や堯惠を経由することで伝存しえたのだと言つてよいであろう。

とりわけ注意されるのは常縁の役割である。天理本・浅野文庫本『井蛙抄』はともに第一末に「常縁在判」とあり、さらに第五末の「跋文」と『抄』の直後に同じく常縁の署名と判が見られる。後者の場合、浅野本は署名・書判そのものの跡を忠実に似せ書きしたと思われ、天理本もまた「常縁_判」と記して（字形は既に元の形を保存しているとは見えないものの）その上段にわざわざ花押を写し、「判趣如此」と註記している。右の書判は古今集

の註釈書『行乗六卷抄』の、円雅から常縁へ伝えられた本（東山御文庫本¹⁶）の各巻奥に、円雅の寛正二（一四六一）—三年の奥書とともに記されている常縁の署名ならびに花押の筆跡と近似しており、確かなものと認められる¹⁷。

では『抄』の本文は常縁の筆作に成るとしてよいかと言えば、必ずしもそう断じられない。先引②の、作者同じ人たるに依りて云々、と言い『抄』すなわち頼阿作と認定する註記を付したのが常縁その人である可能性はあり、むしろその可能性は高いのではないかと推察される。しかし右記した六卷抄の常縁署名はテキストを相伝したという事実を加証するために付されていたのと同断だとすれば、『抄』の当該の署名においても、常縁は『井蛙抄』第五末に、跋文と『抄』とが頼阿ゆかりのものであるという事情を確認すべく、署名・書判を加えたのだと考えておくべきであり、常縁みずから『抄』の著述そのものを行なったと見るべきではないだろう。しかし『抄』の内容を読み、『井蛙抄』と併せてその本文を手ずから写し置いた常縁の作業の意義は——同様に『抄』のテキストに関与したはずの堯惠の場合とともに——改めて銘記されるべきであろう。

ここで時を遡るように流伝史を振り返ってみると、室町期に『抄』のテキストに関与した人として、私たちは三条西公条の名を確かめうる。国文学研究資料館蔵本『井蛙抄』（タ2・8）の第六末に次の奥書が見える。

此一冊不慮電覽之次、不顧魯魚之誤頃馳牒冀筆卑跡畢

永正戊辰蘭秋十三日 相公羽林藤判

七月九日立筆、同十三日晚功了

この年（永正五年（一五〇八））公条は（時に参議右中將、二十二歳）『井蛙抄』六巻を書写したのであるが、その四年後さらに公条は『抄』をも書写したらしい。すなわち当該本には右の奥書に続いて水蛙眼目・跋文と『抄』ならびに次のような奥書があつて、この間の公条による関与の跡を伝えている。

此一冊先年電覽之次如形令書写之、今以彼本校合處漏脱事繁多也、仍書入落字補之了

于時永正第九臘月廿九日 権中納言判

永正九年は公条、正三位（二月六日叙）権中納言である。¹⁸

その永正年間より遡つて、鶴見大学本からは文明十九年（一四八七）の三条西実隆の関与を知りうる。すなわち同本『抄』の末尾に次の本奥書が記されている。

本云

文明十九年六月十九日書之 道遙院殿¹⁹

この鶴見大本の『抄』はのちにも再度触れるとおり東家の人々における享受や伝承を偲ばせるテキストであるが、それが実隆とも繋がっていたことは興味深い。その実隆からさらに遡れば、『抄』のテキストの流れは結局、堯惠そして常縁に辿り着く。すなわち現存資料による限り、『抄』の成立時期は、常縁・堯惠以前——しかも前述の如く常縁自身の作ではないと考えられる——

—と、ひとまず下限を定めることができる。

また見方を変えて、堯孝以後、常光院流において種々の歌書が授受されてゆく状況の中において眺めれば、就中、円雅から常縁へと授受されたテキスト類の流れのもとで、常縁經由の『井蛙抄』そして『抄』は存在したのだと位置づけることができるだろう。

さらに言えば、『井蛙抄』をめぐる伝本の奥書（先表にA～Jの略号で示した）から知られるように、人では堯孝から円雅・常縁・堯恵に至る人々、時期で言えば、（慶安板本始め流布本系統本に見られる）⁽²¹⁾ ABCDの奥書のうちAの「延徳元年」（一四八九）、Bに見える「明応九年」（一五〇〇）、あるいはGの「明応甲寅」（同三年（一四九四））、先引Iの「明応三年」、Jの「明応七年」などの明応年間の年次が重なっている。これらと合わせて、明応二年の年紀を持つ堯恵の、『愚問賢注』の頼阿奥書の引用からまず書き起こしているところの『和歌深秘抄』などをも加えて考えれば、この時期、頼阿の言説を一齐に問題にしている感がある。

〈延徳・明応〉とえば、室町後期へと至る画期としてそれ以前と区別して、井上宗雄が線を引いた時期に重なっている。すなわち室町前期から室町後期へ至る変り目の時期に、頼阿の言説を、その著作を通して確認し拠り所ともしようとする指向が澎湃としてあったことを『井蛙抄』関係の伝本群から知りうるのである。『抄』もまた、そうした頼阿のテキストの流伝と享受

という状況の最中にあつた。かくして、『抄』のテキストをとりまく外在的な条件、『抄』自体の流伝上ひいては書誌的な位置については比較的明らかになってきたと言えるのではなからうか。

5

以上の検討に基づいて、改めて『桐火桶抄』の本文を有する伝本を列記すれば、次のとおりである。

- 1 天理大学附属天理図書館蔵（911・2・15）『井蛙抄』大永七年（1527）写
- 2 広島市立中央図書館蔵浅野文庫本（387）『井蛙抄』（浅）
- 3 鶴見大学図書館蔵（911・101・E）『詠歌口伝書類』の内（鶴）
- 4 東北大学附属図書館蔵（丙1-11・82）『井蛙抄』慶長十一年（1606）素然加註（東）
- 5 関西大学図書館蔵岩崎美隆文庫本（911・2041・T1・1-2）『井蛙抄』板本文に素然本を加う（岩）
- 6 国文学研究資料館寄託久松本（11・82）『井蛙抄』巻序不整、綴誤りか（久甲）
- 7 国文学研究資料館蔵（タ・8）『井蛙抄』寛永十年（1633）写（資）
- 8 彰考館蔵（巳18・0743）『水蛙眼目』内題「和歌雑談聞書」、小山

田与清写

(彰)

9 岡山大学附属図書館蔵池田家文庫本(貴・29)『和歌聞書』

(池)

10 静嘉堂文庫蔵(83・10・155)¹⁹

『井蛙抄脱漏』板本の「脱漏」

を補った中にあり

(静)

11 国文学研究資料館寄託久松本(11・81)『井蛙抄』寛政九年

(1797)写

(久乙)

12 島根某家蔵『井蛙抄』明和六年(1769)書写奥書、国文学研究

資料館蔵マイクロフィルムによる

(某)

13 続群書類従巻四六二(書陵部蔵写本(43・2))『井蛙抄』

(続)

『桐火桶抄』本文ならびに校異 (底本 天理大学附属図書館蔵本『井蛙抄』911.2・イ)

〔本文〕

桐火桶抄

或仁秘抄とてみせ侍し一帖秘抄

京極中納言入道殿製作ニあらサル由見及条々

(1) 一朝なく木のは色つき鳴鹿の事ハリしるき秋の山かけ

たかりの雲なかめに暮ぬらん宿かる嶺の花の木のもと

此両首をなのめならず褒美してなとやかゝる哥の

よまれさるらんとうらやまれき

あさなくの哥ハ建保二年内裏秋十五首内也

これらのうち比較的優れる1の天理本を底本として本文を翻刻し、他本との異同を以下に掲げてみたい。(天理本は『井蛙抄』の完本全六冊であるが、ここでは、第五冊末に既述の如き形態で付載されている当該「桐火桶抄」の部分のみを切出して掲げる。翻刻に際しては、繙読の便宜や印刷の都合を考え一部書写形式を崩したが、改行などを含めなるべく元の姿を保存するようにした。校異は、表記の相異を省き、異文の生じている箇所のみを本文頭に私に付した番号毎に行を追って掲出した。校合本の名称は右の伝本一覧の下部に記した略号による)

五条入道殿ハ元久元年逝去十一年後哥也感歎返々不審

たかりノ哥ハ玉葉集に暮山花とて入それほと穠美哥

京極も子孫もなとか不撰入して玉葉までもれけん不審

加茂御幸御歌幸欽時哥合也此事又新古今以後事欽

(2) 一 俊頼朝臣哥ノたとヘニ天上人両三み出、時々扇拍子ヲ

一二うちすさみてたかゝらぬ程に哥うち詠したる面影

とや申へからん

催馬楽今様などにもなくて扇拍子打て哥詠すらん事さる

事あるへしとも不覺

(3) 一 後京極殿御事をたゞ摂政と被書たる事ハ拾遺愚草の世にとゞ

まりて諸人見るへきにたに故殿摂政殿なとかゝれたるに

内々抄物ニ摂政とかゝるへしとも不覺

(4) 一 彼御哥たとへにいとけたかくつくれる中殿のみすあけたるニ

花妓柳(ママ)胃のたゞ二所さしむかひて四絃十三絃の楽にてハなくて

たゞてすさひにかきならしつゝ云々

中殿とハ清涼殿をこそ申にこれハたゞ人の家の寢殿なと

のていにて侍る心えかたし

(5) 一 物ニたとへたる哥仙中に棟梁順通具有家

なとか躬恒忠岑などをハさしをきて棟梁順不審

又通具有家ハ京極心にかなハぬ哥よみにて新勅撰などにも

哥数すくなく入られたり又百人一首とて上古以来哥仙百人を

定家の撰はれて候にも棟梁順通具有家四人から不入候

別して被出さるへし共不覚候只新古今撰者なればの

大様才覚の所為歟

(6) 一 鎌倉右府云々

此抄奥書ニ建保五年臘月下旬記之訖 遺老藤原朝臣定家云々

鎌倉右大臣建保六年十月任内大臣十二月轉右大臣此条如何

(7) 一 ^{其時}女房中ニ俊成卿女許被入たる事

此人京極心ニ不叶哥人也仍新勅撰二条院讃岐十三首

殷富門院大輔十五首八条院高倉十三首俊成女八首

而住江の月夜神の御心までもさこそと

たとへられたる太以不足信用

(8) 一 慈鎮和尚を慈円と計被書たる事

拾遺愚草ニ大僧正或座主なと被書たり是又不審

(9) 一 折敷裏にて切物三事

大夫入道殿ハ狹閑の餘胤^{後弘}として閑窓ニ道をまなひたる人也

さやうの事とて可被秘藏ニあらず是ハ蓮阿と申者西行ニ
随逐して哥事を聞たる事共記したる中に西行か申

たる事也それハ下北面にてさやうの事をも秘藏しけん
其謂ありかれをみたる人のかける事にや

(10) 一 虫食ノ御あそひノ時トイヘル事

虫食ノ在如此

一 内宴相撲節などハ朝家大なる事也

マ、
一 儿たえたる事也内々御酒宴などを儿へしとも不覚

(11) 一 古今の誹諧相傳ノ人またくなしされハ家重事古今大事此事也○

誹諧と申ハ躰ハ利口也 云々 子孫を思ふゆへニ

かたはしつゝ書付て侍りゆめくもらしみる事不可有

此事清輔奥義抄ニくれくゝと書て心利口詞利口

なとくハしく書たる事也他家抄物ニ事ふりたる事をかやう

に申さるへし共不覚返々不被信事也

凡文章も義理もいつくも京極殿ノ製作とハ不見

此十一ヶ条大に先不審事也

〔校異〕

桐火桶抄―ナシ(鶴、同本冒頭註記、別掲参照) 桐火桶抄(某)

或仁―或人(彰・池・静・久乙・某・統)

中納言入道―入道中納言(彰)、殿一の(静・久乙・某・統)、

製作ニあらサル―非製(彰)、由―事(静・久乙・統)こと(某)

- (1) 一ナシ(静・久乙・某・統)、鳴―なつ(久乙)、山かけ―
山かせ(静・統) 山風(久乙) やまかせ(某)
里の―里も(久乙)、嶺の花の―花の嶺の(彰)
なとや―なとか(久乙)

うらやまれき―うらやまれ侍りき(岩)

- 十五首―十五首の(岩・資・彰・久乙・某 十五首の(静)
五条―京極(池)、殿―ナシ(久乙)、後―後の(鶴・岩・彰・
久乙)、不審―不審^{本ノマ}重^{本ニハ}如此在(浅) 不審也(彰・池・統)

に―ナシ(久乙)、暮―普(岩)、穢美―穢美の(鶴・岩・久
乙) 積美(某) 賞美(統)

京極も―京極殿も(彰) ナシ(静・久乙・某・統)、玉葉―玉
葉集(彰)、不審―不重^重浅(浅) 不審也(彰・池)

- 賀茂―加茂の(某)、御幸―御幸之(鶴) 御幸の(岩・久乙・
某・統)、又―ナシ(某)、以後―以来(池) 以後の(岩・久
乙・某)、坎―也(静・久乙・某・統)

- (2) 一ナシ(静・久乙・某・統)、天上人―殿上人(鶴・久甲・
彰・池・久乙・某・統)、両三―両三人(静・久乙・某・統)、
ゐ―位(岩) ナシ(静・久乙・某・統)、出―いて、(浅)
鶴・東・岩・久甲・資・彰) 出て(池・静・久乙・某・統)、
ヲ―ナシ(久甲)

すさみて―すさひて(鶴・池・久乙)、詠したる―詠しられた
る(岩) 詠したる(池) とや―なとや(岩)

催馬楽―此儀催馬楽(久乙)、なと―ナシ(静・久乙・某・統)、
扇拍子―扇子拍子(彰・某)

- (3) 一ナシ(静・久乙(朱丸あり、以下同)・某・統)、殿―殿
の(久乙) ナシ(東・岩・静・某・統) と―とも(岩)、被書
たる―被書(資・静・久乙・某・統)、愚草―愚藻(某)

諸人―諸人ノ(鶴)、へきに―へき(彰)、故殿―古殿(彰)、
摂政殿―摂政(某) なと―以下次行の「摂政」まで脱(某)
内―内々の(鶴・久乙)、抄物―抄物木(等) (池)、摂政
と―摂政(池)、かゝるへし―書へし(岩)

- (4) 一ナシ(静・久乙・某・統)、御哥―御哥の(鶴・池)、た
とへに―たとへハ(岩)、いと―ナシ(彰)、みず―翠箔(彰)
柳胃―柳胃(浅) 柳男(鶴・東・岩・久甲・資・彰・池・静・
久乙・某・統)、た―ナシ(彰・池)、十三絃―十二絃(浅・
久甲・彰・池)

てすさひに―手すさみに(静・某・統)、つゝ―なかくめいたさ
せ給へるなとや申へき(岩) つゝと(彰) つと(某・統)、云
々―ナシ(池)

これハ―タレハ(鶴)
てい―程(某)、侍る―侍るを(統)

- (5) 一ナシ(静・久乙・某・統)、たとへたる―たとへる(岩)、
哥仙―哥仙の(岩・久乙)、中―ナシ(鶴)、通具―道具(池)
なとか―なと(久甲)、なとをハ―ヲハ(鶴) なとを(池) な
とは(静・久乙・某・統)

有家一家(久乙)、新勅撰—新勅撰集(某・統)

すくなく—少シ(鶴)、又一ナシ(池)、以来—已来(浅・久甲・某)

定家の—定家卿の(鶴・彰) 定家(静・久乙) ナシ(某・統)、撰はれて—えらまれて(某 撰はれたる(岩)、候にも—作にも(岩)、通具—道具(池)、不入候—不入(岩)

被出さるへし—取出さるへし(鶴・東・久甲・彰・池・静・久乙・某 取出るへし(統) なれはの—なれは(久甲・彰・池・静・久乙・某・統)

大様—大概(鶴・久甲・久乙・某)、才覚—才学(浅・資・某・統)

(6) 一ナシ(静・久乙・某・統)、云々—云(統)

奥書ニ—奥書(彰・池)、訖—ナシ(岩)、朝臣—ナシ(池)、定家—定家と(岩)

轉—任(岩)

(7) 一ナシ(静・久乙・某・統)、其時—ナシ(鶴) 本行中にあり(岩・久甲・彰・静・久乙・某・統) 此時(池、本行中)、中ニ—中(鶴)、許—中(久乙) ナシ(彰・池)

京極—京極の(岩)、心ニ—心には(某、新勅撰—新勅撰に(彰・池)

俊成女—俊成卿女(資・彰)

而—ナシ(資)、住江の—住江(静・久乙・某・統)、月夜—月の夜(彰)、神の—神の御神の(岩) 神楽の(静・久乙・某・

統)、御心—御慮(彰)、までも—まで(某・統)、さこそと—

ナシ(浅)
太以—を以(池)、信用—信申

(8) 一ナシ(静・久乙・某・統)

愚草—愚藻(某)、なと—なと、(久乙)、是—ナシ(久乙)、不審—不審也(池)

(9) 一ナシ(静・久乙・某・統)、折敷—折敷の(鶴)、三事—之事(静・久乙・某・統)

狹閑—狹閑(岩)

とて—まで(池)・可被秘藏ニ—可被秘藏(鶴)、可被秘藏事に(久乙・某・統)、西行ニ—西行と(岩) 西行か(某・統)

随逐—随逐(久甲・資・彰・池・彰・久乙・某・統)、哥事—哥の事(鶴・岩・彰・池) 哥書(静・久乙・某・統)

事也—事共也(彰)、をも—を(資・彰・池)

かれ—ソレ(鶴) 以下「にや」まで脱(久甲)、人の—人(池)

(10) 一ナシ(静・久乙・某・統)、虫食—
虫喰(静・久乙・某・統) ナシ(彰・池)、

ノ御あそひ—御あそひ(彰) 引の御あそひ(静・久乙・某・統)、時ト—ときに(久甲・彰・池)、イヘル—いつる(彰・池) 一儿 虫食ノ在如此—ナシ(東・岩・久甲・資・彰・静・久乙・某・統)、内宴—内宴(資・久乙・某・統)、節—節會(岩)

ナシ(某・統)、朝家—朝家の(鶴・資) 几—
岩・資) 一(久甲) ナシ(彰・池)、たえ—引立(久乙) 引

たえ(某・統)也―ナシ(浅)、内々―内々の(久乙)、虫食なと
を―なと(静・久乙・某・統)、マル―(鶴・東・資)

(久甲) ナシ(岩・彰・静・久乙・某・統)、へし―申へし(鶴)
引へし(岩・静・久乙・某・統)

(11) 一―ナシ(静・久乙・某・統)、古今の―古今(岩・彰・池・
某・統)、相傳ノ―相傳(彰・池) 相傳の事(静・久乙) 相傳
事(某・統)、されハ―ナシ(鶴)、家―家の(鶴・岩)、此事
―ナシ(彰・池)、〇―ナシ(鶴・岩・資・彰・池・静・久乙・
某・統) □(空白) (久甲)

申ハ―申(彰・池・統)、也―也と(統)

書付て―書付(鶴)、侍り―侍る(岩・静・久乙・某・統)

くれ―と―くれ―(彰・池・静・久乙・某・統)

他家―他家ノ(鶴)、事―書(久乙・某・統)、ふりたる―ふ
れたる(彰・池) 不被信事也―不被信用也(池)

九―ナシ(資)、京極殿ノ―京極の(静・久乙・某・統)

大に―に(久甲) ナシ(彰・池)、先―ナシ(静・久乙・某・

統)、不審―不審の(岩・静・久乙・某・統)

6

本文につき一二註記しておく。

たとえば後半の(10)に見られる虫損による不明箇所は諸本共通
しており、いずれも元は一つのテキストから派生したと推測さ
れるが、校異に示したように本文中に所々少なからず異同を含

んでいる。強いて分ければ、序的一文と末尾の一段の字句によ
つて本文は、

(a) 京極中納言入道殿製作ニあらサル由見及条々……此十一ヶ
条大に先不審事也 「由(よし) ―大に先(大にまづ)」型

(b) 京極中納言入道の製作にあらざる事見及条々……此十一ヶ
條大に不審の事也 「事(こと) ―大に」型

の二様に分かれる。(a)の形を示すのは1の天理本を始め234
57の諸本、(b)は10111213の諸本である。6は「よし」―「ま
づ」、89は「由」―「先」の如く、それぞれ中間的な形を示す。

注意されるのは、これらの差異は小稿冒頭に述べた、『井蛙抄』
『水蛙眼目』との結合状況による形態上の差異とほぼ対応してい
る点である。すなわち『桐火桶抄』の本文は根を同じくしてい
ながら流伝する間に、幾何かの相異を生じた、とひとまず想定
されよう。当の本文は、まず『桐火桶抄』の標目に始まり、執
筆意図を述べた序的一文ののち、十一に亘る不審点の条々があ
り、定家作への存疑を強調した末尾の一文で閉じられる。

さて、以上の本文内容を先掲の異同に留意しながら細読する
ことを通して私たちは、『桐火桶抄』筆者による『桐火桶』批判
の論点をつぶさに吟味することになるであろう。そのための基
となるテキストの実体を見定めるべく、小稿では書誌的な知見
について整理を施してみた。

註

- (1) 久曾神昇「井蛙抄と水蛙眼目覚書」(『書誌学』13・3 一九三九・九)
- (2) 井上雄「中世歌壇史の研究 南北朝期」(一九六五、改訂新版一九八七 明治書院)
- (3) 松平黎明会編「松平文庫影印叢書 五 歌学・歌論書編」(一九九三 新典社)「井蛙抄」の解題(齋藤彰)
- (4) 野中和孝「長崎県立図書館蔵本「井蛙抄」——卷六・翻刻と解題——」(『活水論文集』36 日本文学科編 一九九三・三)、同「井蛙抄」異文——長崎県立図書館蔵本の紹介——(『ぐんしよ』20 一九九三・四)
- (5) 伝本により簡条の立て方に入出入りがあり、おのずと条数も異なる。いま東北大本により示すと、a₁は冒頭条から第二八簡条、今出河院近衛局被語云(条頭の語句のみ示す。以下同じ)まで。a₂は冒頭条から第六三簡条「故宗匠云初心なる時ハ」まで。a₃は冒頭条から第六四簡条「又云民部卿入道被申しハ」まで。a₄は第六四簡条から最末条まで。a₅は第六五簡条「勅撰にハ異名ともあり」から最末条まで。
- (6) 「此已下 禁裏御本には無是」。
- (7) 「是ヨリ已下ハ高倉ノ本ニハ不可有之」。第六四簡条の行間もしくは末尾にある。「高倉ノ本」は「堯孝所持本の意か」とする井上宗雄の指摘に従う。井上(2) 579頁参照。
- (8) ○は中途より主として「京極黄門」と称するもの、「一は主として「京極」と称するもの、△はその中間形態。呼称の様態とその意味については別稿で細述したい。
- (9) (3)に同じ。
- (10) 書陵部蔵本(266・242)、国文学研究資料館蔵久松本(A16)、大東急記念文庫蔵本(41・2・293)。他に竜門文庫蔵本(未見)。井上(2) 578-579頁ならびに井上同書・室町前期(一九六一、改訂版一九八四 風間書房)220頁参照。いずれもa₁の本文を持つ。なお「国書総目録」は「水蛙眼目」の項に別称として「雑談記」の名を掲げるが、テキストの実状に適わしくない。小稿のような分類名称を用いて整理しておく。「水蛙眼目」の名称とその実体についても再検討すべきか。
- (11) 尊経閣文庫蔵本(第一のみ、一軸、伝頼阿筆)、高松宮旧蔵本(第一、五軸、伝堯孝筆、跋文b₁、註記②、定家の呼称は一に属する)、静嘉堂文庫蔵本(502・20・205、第一・二のみ)、熊本大学附属図書館蔵北岡文庫本(2・3・40、第一・二のみ)、引前市立図書館蔵岩見文庫本(w911・1・71、第一・二・三)まで。
- (12) 大宰府天満宮小島居家蔵書(30)「水蛙眼目」(『歌論集』所収)は雑談を一部抄出。浅井幽清「撰津徴」(内閣文庫蔵本218・38)は撰津関係記事を抄出。他に高松宮蔵本(題簽扉に「井蛙抄」扉小書に「制詞加難詞歌のよみかた」とある)は詠歌一鉢と井蛙抄第三を吸収。同一書は高松宮旧蔵中に他の一本あり。「知海抄」(宝永元年(一七〇四)越智正斎自序)は井蛙抄第二の註釈(静嘉堂文庫蔵本517・17・2189、宮城県図書館蔵伊達文庫本911・20・35。ついでに記せば、井蛙抄板本に諸種あり。また早稲田大学図書館蔵本(ヘ4・228・11・2)は慶安板本写か。東大寺図書館蔵本(41・212・1)は貞享三年板本写。なお兼築信行氏蔵零葉(『抄』を伴う井蛙抄の二葉)につき同氏より教示を得た。以上の諸伝本は先掲表の伝本中に含めていない。
- (13) 日本歌学大系・第五巻。以下同じ。
- (14) たとえば「愚問賢注」の「初心の人心をさきとして詞を後にすべきか」云々に対する注に、「古迹と申す聖教に、初心美難、由難退、何時成といへり。何事にも金言者歟」とあるのは、水蛙眼目跋文の「古迹と申聖教にはしめて入ハまことにかたし、かたきによりてしりそかハ何時にか成せんといへり、何事にもおなしかるへし」(東北大本)と類似する。
- (15) Hは天理本、I・Jは東北大本による。なお引用するIは(先表に示した)I₁に相当する。これには異文I₂がある。左のとおり。
I₂ 右此書者頼阿法師對為世卿所被聞書也、号井蛙抄、六軸合為一冊、於二条家尤秘藏者也 明応三年正月十一日(署名なし)「久松本乙」による。朱による返り点等を省いた。島根某家本・続類従本には「尤為秘藏者也」とある。「
I₁は仮りに称した。彰考館本「水蛙眼目」の跋文奥に、文言は無く打ちつけに「法印堯惠判」とのみあるのがそれ。同本「抄」の奥には「

が記されている（ただし署名を欠く）。

(16) 書陵部蔵マイクロフィルムによる。

(17) 片桐洋一『中世古今集注釈書解題 三』（一九八一 赤尾照文堂）参照。

(18) 当該本には以上の奥書の後、さらに仮名本「詠歌大概」が付載されている。

(19) 『実隆公記』は此の日の記事を欠く。なお文明十九年は七月二〇日、長享に改元。

(20) 井上宗雄（10）掲出の室町前期 188 頁参照。

(21) 各奥書の文面は省略に従う。板本あるいは日本歌学大系・第五巻所引、ならびに（1）（2）（3）（4）の諸論考所引を参照。

(22) 当該奥書は以下のとおり。「右頼阿之抄、二條家之目足也、努々不可外見、卒介書写、鳥跡可恥々々 明応甲寅暮秋上旬（花押）。国文学研究資料館蔵久松本（99・65・112）による。同本は伝宗祇写。

(23) ただし 3 の鶴見大学本は標目を欠く。代わりに、「一偽作之書事」（イ）、「六卷書第五云」（ロ）と二行に記したあと、序的一文以下を書写している。さらにイロそれぞれの下に細註が、イに「就称定家卿製作十一條不審之儀也」、ロに「末ニ此書ヲ被書候也、彼抄内ニ此十一ヶ

条ハ不入候、可有御心得候」の如く見える。イに云う「偽作之書」の概念は、『桐火桶抄』の趣意を簡明に解説した註記とともに注意される。ロの「六卷書」とは註に云う「彼抄」と同様「井蛙抄」を指すはずである。小稿で検討した「井蛙抄」と「桐火桶抄」の關係（相互の位置關係）を表付ける記載である。そもそもの鶴見大本は、一連の東家流口伝書類の中に組み入れられたテキストであつて、これらの記載は東家流における兩抄享受の一端を伝えるものとしてすこぶる興味深い。

(24) ちなみに翻刻した本文の(9)に見える「随逐」は底本のまま。易林本節用集の「随縁……逐」や、他本（校異参照）にも見える「随逐」に訂して用いるべきか。

大学 における口頭発表の一部をまとめたものである。

*

『桐火桶抄』本文の引用・掲載を許可された天理大学附属天理図書館ならびに閲覧と校合本使用につき格別の御配慮を賜った広島市立中央図書館、その他の諸文庫の關係各位に対し、厚く御礼申し上げる。